

山砲兵第三連隊 (通称番号森三〇七〇三部隊)

年月日	概	要
昭和四年三月	山砲兵第三連隊編成完結(於中支) 位置 北部ビルマ、ビルバン、サガエル、ビバン、モールメン	
五九	中支より「ビルマ」に転進 印度追攻作戦「ゴヒマ」附近の戦斗及び支那作戦	
五九	「シヘボ」 「カンパル」 附近の戦斗	
五九	「イラワジ」 河会戦及び「マルタバン」に向う転進	
終戦	編成裝備並に指揮隷属関係及び其の変遷の概要	
編成	連隊は三ヶ大隊編成にして、大隊は東部及び三ヶ中隊並に大隊後列を有す	
編成人員 約二二〇〇名		
裝備		
指揮 第一、二大隊、九四式山砲(一ヶ中隊三門) 第三大隊は九一式一〇榴なり		
変遷の概要		

資料トシテ

226

1934

年月日	概	要
昭和 八 五	印度進攻作戦の概況 終戦後還迎の行動の概要	
九 四	ビルマ、マルタパン、東、マルタパン、附近	移動、徒歩
九 五	「シンジマイ」↓「ゼマトエ」	列車
二 三	「ゼマトエ」↓「ムドン」	列車
六 六	「ムドン」↓「モールメン」	W 57号
六 七	「モールメン」↓「日本」	
印度進攻作戦のため編成。其の概なるも、装備は、第三大隊共九四式山砲に改編、且、一ヶ中隊二門（但し九中隊のみは一門）とす 印度作戦反転中火砲の破壊損耗一三門に及び、残すは四門となる 「マンガレー」にて九四山砲及び野砲（三八改野）を補充し、合計一〇門となる 「イラワジ」河会戦及び前進作戦のため七門損耗し三門（84）となる 角と岩、扇地（ジマワ）製造撃砲八門を補充事後終戦となる 参加する主要なる作戦（戦斗）の概要 印度進攻作戦同反転作戦 イラワジ河会戦（感状受領）		

1935

年 月 日	昭和 二 〇 七八 年
要	概 其の部隊の経歴中、特異と認めらるる事項等 「イラワジ」会戦に於て、「ピルマ」方面軍司令官より感状を受く 歴代部隊長名 大佐 白石久康 大矢部省三 高田賢重

~228~

1936

中三師団工兵中三連隊長

鈴木

孝

年月日	概	要
昭和四 五 八 九	軍令陸甲中二四号により、北支那に於て編成完結 函貢上陸 緬甸に転進 「ウ」号作戦（「ゴヒマ」攻略）に参加す 「ゴヒマ」附近並に「アラカン」山系中に於ける戦斗に於て 戦死 将校 三名 下士官 二三名 兵 一〇四名 戦傷死 兵 一〇名 前記戦斗間及び以後の転進行動間、特に「チンドウイン」湖畔行動間に於て、 戦病死 准士官下士官 九名 兵 二四一名 全期間を通しての生死不明者 兵 六名 戦死確認者 准士官 一名 兵 一五名 戦病死確認者 下士官 二名 兵 九五名	本作戦は、彈藥秣糧の補給皆無の状態に於て、約半歳の長きに亘り激烈なる戦 斗を続行し「アラカン」の天峻と「チンドウイン」湖畔の悪疾瘴癘の濕地に行 動せる結果、科兵の疲勞困憊其の極に達し、体力の消耗甚だしく「未刺」「マ

1937

年月日	概
昭和 九	シリヤ「脚気」等に罹患するもの続出し、治療するに藥物なく、後送するに輸送機関なく將道は死屍累々として、其の惨状、真に眼を覆はしむるものあり 盤作戦に参加し、「キヌ」附近の戦いに於て 戦死 下士官 一名 兵 九名 戦病死 将校 一 下士官 八 兵 五五 生死不明者 兵 一 戦死確認者 将校 一 下士官 二 兵 三 「イラワジ」河畔会戦に参加し、「マンダレー」西方「イラワジ」河沿岸地区及び「マンダレー」南方「キヤクセ」附近の戦いに於て 戦死 将校 三 下士官 六 兵 三四 生死不明 下士官 一 兵 一 戦病死 兵 四 戦死確認 将校 一 下士官 三 兵 八 克作戦に参加「キマクセ」南方地区より「マルタバン」地区に転進し、其の行動間 戦病死 下士官 二 兵 九 「イラワジ」河畔会戦に引続き「シヤン」山系を行軍にて転進せるため、其の間の給養の不及と疲勞累積のため、「永廟」「マラリヤ」に罹患する者多く、特

年月日	要
	ヒコケマピユール・コパパン 間に於て、戦病死者を出せり 歴代部隊長名 部隊事情精通者 陸軍大佐 鈴木 孝 (編成以来) 訓 令 陸軍大尉 河野 勝 本一中隊長 (製作以後) 〃 村 組 平 次 本部附功績掛 陸軍少尉 金 井 知 夫 本一中隊長 陸軍少尉 春 藤 政 治 本二中隊長 陸軍中尉 秋 山 一 雄

1231

1939

第三師団通信隊部隊

通信隊長

西

村

七

男

年 月 日	概	要
昭和四年七月五日	久留米留守第五六師団通信隊に於て、編成 門司港出發	
昭和四年九月二日	緬甸に転進、爾後、緬甸に於て、警備 緬甸防衛中「シェボー」県「キス」附近の対空戦に於て、 下士官兵二名戦死す	
昭和四年九月二日	「ウ」号作戦及び九号作戦並に次期態勢移行の作戦中「コヒマ」附近に 下士官兵四七戦死	
昭和四年九月二日	「シタタン」附近に 将校二名下士官兵九三名戦死、生死不明者九名	
昭和四年九月二日	「イラワジ」河畔の会戦並に「メークテラ」附近の会戦に於て、 下士官兵二一名、戦死、生死不明者六名	

232

0201

1940

輸重兵隊三一連隊

年月日	概	要
昭和四年四月	緬甸国「メイミョー」に於て編成完結（カー八師団輸重兵隊カー二連隊転出者を基幹とす）（爾後）	
九	に至る間「マングレー」	「アマラプラ」附近にありて、北部ビルマ防衛作戦並に、次期作戦準備に参加せり
九	主カを以て「ナーピン」	一部を以て、「ウントウ」附近に転位し「インドウ」
五、三、三	「ナーピン」附近より「チンドウイン」	河々岸への軍需品集積輸送に任じ、「チンドウイン」河渡河「フオートケアリ」
	「ソムラ」	「ゴヒマ」道を「ゴヒマ」に急進、兵団「ゴヒマ」
	攻撃間（強如部下餉）	一部を以て、「ゴヒマ」
	カー線附近、主カを以て、「ゴヒマ」	東南方ニ一哩附近「ケラリマ」に位置し
	兵団軍需品及び患者輸送並に、叙方地区警備に備ず	
	本作戦間 戦（傷）死 一ニ名	戦病死 二六名、生死不明 五名を出す
六	反転し、「ウクル」	「フミネ」
高	「タナン」	「トンヘ」
	「シタタン」に同じ転進す	「シタタン」道を此の間「アラカン」の天候に於て、發砲と飢餓との至難なる条件を克服し、悉

年 月 日		概 要	
至 自	至 自	至 自	至 自
六 五	入 五 三 三	四 一 三 七	一 五 一 五
者後送を遂行す		以降本集結迄の間	
「シッタ」附近にありて、軍「シッタ」河渡河転進掩護の急の糧秣前送患		戦死 将 校 三	
者後送を実施す		戦病死 将 校 一	
主カは「チンドウイン」河渡河後「モーライク」「カレツ」「イエウ」道		生死不明一三名を出す	
を一部は「ワヨンゴン」「ピンレブ」「ウント」道を転進		計一九六名	
「キヌ」に集結す		「シェホー」及び「リガイシ」附近に在りて、盤作戦参加	
以		「タダウ」及び「メークテラ」附近に在りて、「イラワジ」河略会戦並に、	
		「メークテラ」附近の会戦に参加	
		「トグー」「カハ」「モチ」附近に在りて、鬼作戦参加	
		「モチ」「パアン」「ビリン」「タトン」「パアン」道を転進	
		「チエジマン」(「パアン」南方二哩)に集結	
		主カを以て、「チエジマン」附近一部を以て、「マルタバ」及び「サルウ	
		イン」河沿岸に位置し、「サルウイン」河沿防衛作戦周諸輸送(水路輸送を含	
		む)に任す	

31の外ビルマ

年 月 日	概 要	至日		至日	
		四 二	四 五	四 一	四 二
昭和 一 五 八 五	「チエジマン」に於て、終戦 「ゼマトエ」(「タトン」東北方ハ村)に集結、 「タトン」附近 英軍諸作業に任ず 「ムトン」に集結、 「ムトン」地区英軍諸作業に任ず 「ペマジー」集結、 「ペギー」附近英軍作業に任ず 「ランターン」市、 「アロン」集結、 「ランターン」市、 英軍作業に任じつ現在 に至る				

~235~

1943

1943

第三一師団衛生隊部隊

衛生隊長

徳

永

節

二

郎

年 月 日	概	要
昭 和 四 二 五 八	広東第一〇四師団に於て、編成 広東省黃埔出帆、爾後、仏印西貢馬未經由緬甸国蘭貢に進駐 此の間、公傷死矢一 戦病死一 中部緬甸防衛戦並に対空戦に参加 本戦斗間 戦死矢一	
昭 和 九 二 二 一	ウ号、九号並に、次期態勢移行の豫め作戦に参加 本戦斗間部隊長戦病死 戦死、准士官 下士官 一五 矢九 戦病死 准士官 下士官 七一 矢一三六	
昭 和 一 九 六 三	盤作戦に参加 戦死 将校三 准士官 五 矢三〇 下士官	
昭 和 四 一 三 七	戦病死 将校四 准士官 一〇 矢一一〇 下士官	
昭 和 四 一 三 七	「イラワジ」河畔並に「マーケットラ」附近の戦斗に参加	

~236~

1944

年 月 日	概	要
昭和 八 五	戦死 下士官 四 兵 九 戦病死 同 右 一 兵 三 免作戦に参加 戦死 同 右 一 准士官 二 兵 一四 イサールウイン、河益防衛作戦に参加 戦病死 下士官 一 兵 五	終戦後の状況
昭和 九 八	緬甸国 ガバ県インニン駐留	緬甸国
昭和 二 〇	緬甸国 タトン県ゼマトエ、イロカレ駐留	緬甸国
昭和 四 二	緬甸国 ムトン県ムトン駐留	緬甸国
昭和 四 四	中部緬甸メークテラに駐留	中部緬甸
	終戦後 逃亡者 二名	終戦後
	戦病死 一	戦病死
	歴代部隊長名	歴代部隊長名
	初代 陸軍大佐 板谷明彦 (現・戦病死)	初代
	二代 陸軍少佐 徳永節二郎 (現)	二代
	部隊事情精通者 (部隊主力役員迄)	部隊事情精通者
	愛知県南設楽軍新城町並二八一番地	愛知県南設楽軍新城町並二八一番地

第三一師団第一野戦病院（烈才一〇七〇九部隊）

年 月 日	概 要
昭和 四 二	軍令第二四号に基づき近衛歩兵第一連隊に於て編成
四 八	編成完結す
四 九	東京出発
五 三 六	宇品——仏印西貢——泰國「バンポン」に至り、病院開設 三次を馬來「フライ」——緬甸「ラントーン」——「カーサ」県「ナピン」附近 に至り、印度進攻作戦（「ウ」号作戦）に参加
五 三 八	「チンドウイン」河渡河
六 六	「イヒマ」五二〇高地に至る進撃中患者集合所療養所並に、野戦病院を六ヶ 所に開き「イヒマ」に至るや五二〇高地に野戦病院を更に「イヒマ」東側〇 哩及び七三〇哩に患者集合所療養所（後に、野戦病院）を開設
八 三	より「ウクルル」方面に進撃開始、続いて、緬甸「フミ木」——「クウンタット」 ——「シットタン」を経て「オウクタン」及び「クンタウ」に患者療養所開設 より転進「サガイン」集結
八 三	「ギマウセ」に病院開設し、「イラワジ」河畔会戦に「ミヨサ」及び「アバ」 に病院並に療養所を開設

1947

年月日	概 要
三 三	同地撤退より「マカンジ」及び「ナクー」に至り病院開設「シヤン」高源転進に当りては、患者輸送と共に、患者集合所の崩き、遂次、「カロー」 「ロイテ」 「ケマビユー」 「モタ」 鉦山を経て「タトン」県「ケヨ」ンガに至り 病院の一部を「ジンシャイ」に療養所を開設す 編成装備並に指揮隷属関係及び其の変遷の概要 編成装備 人員長以下二四二名、自動車貸車二二車 乗用者一車輛病院医坂二組 指揮隷属関係及び其の変遷 編成完結し 仏印西貢に於て、オ三一師団長、承握下に入る 泰国「ペンボン」に於て、病院開設周は、南方オ二鉄道隊衛生隊長の指揮下に入り、 緬甸転進により、原隊復帰、 爾来 オ三一師団長の指揮下に行動す 参加せる主要なる作戦（戦斗）の概要 「ウ」 另作戦 「コヒマ」 進攻病院開設 「ウクルル」を経て、撤退転進

-240-

1948

年月日	概	要
八 百 二 一	「モールメン」に移動、 「モールメン」地区に、更に移動集結し、次に、 同県「ゼマト」に、更に移動集結し、次に、 同県「ジンヤ」附近に集結を命ぜられ、同地に於て、武装解除を受け、 「バルマ」国「タトン」県「サヨンガ」に於て、終戦の命を受け、 終戦より販運の行動の概要 病院並に、患者療養所開設 「サルウイン」河沿防衛作戦 患者輸送一部患者集合所開設 「ケバ」患者、療養所開設 「ク」作戦 「ミヨサ」附近病院開設 「イラワジ」河畔会戦 「キマウセ」附近病院開設 盤作戦	
六 五	夜、乗船の為の出発命令を得 午前二時、同地出発 「モールメン」に至る	

~241~

1949

年月日	概要
六 天 七 二	乗船出港 広島県大竹に到着す

~242~

1949

1950

オ三一師団等三野戦病院（烈オ一〇七一一部隊）

年 月 日		概		要	
昭和 二一 年 四 月 二 日	至 二 一 年 四 月 二 日	至 二 一 年 四 月 二 日	至 二 一 年 四 月 二 日	至 二 一 年 四 月 二 日	至 二 一 年 四 月 二 日
能本歩兵オ一三連隊補給隊に於て編成 關司港出港仏印西貢着、泰、馬米經由 緬甸國蘭貢着、爾後緬甸に於て警備 「ウ」号作戦、九号戦並に次期態勢 移行の爲の作戦に参加、其の間、病院開設場所 収容患者左の如し		緬甸國「ピニレブ」 病院開設、収容患者 三四四名 印度國「ウクルル」 〃 〃 〃 四九七名 印度國「ゴヒマ」並「ギグヘマ」 〃 〃 〃 一二三八名 緬甸國「クナン」 〃 〃 〃 六一名 緬甸國（ミワタン）「ガリワ」 〃 〃 〃 〃		終戦後の状況 緬甸國「ヒマトエ」 病院開設 〃 二四六名 緬甸國「ムトン」 泉「ムトン」 駐留 〃 〃 緬甸國「パゲー」 泉「パマシー」 駐留 〃 〃	

273

1951

年月日	概	要
本期間戦病死兵二名 歴代部隊長 初代 陸軍軍医少佐 守 正道 (現、要託学生) 二代 大尉 佐野 広 (予) 三代 大尉 石井 献一 (予) 部隊事情精頭者 大分県大分市萩原下本町 陸軍衛生大尉 池田 米男 熊本県熊本池田町九九六 陸軍曹長 清田 継男		

～244～

1952

第三一師団病愚殿 (烈ホ一〇七一二部隊)

ホ三一師団病愚殿長

尾野田昇

年月日	概	要
昭和 三 四 三	軍令陸甲ホニ四号に依り 「ビルマ」国「メイミョウ」に於て「五二」名編成先鋒、爾後「ビルマ」警備 「ウ」号作戦九号作戦並に次期態勢移行の爲の作戦に参加 「サガイン」附近に駐留警備作戦参加 「イラワカ」河畔並に「メイクテラ」附近会戦参加 「カ」作戦参加 「タトン」附近に於て「サルウイン」河並防衛作戦参加 編成装備並び指揮隷属関係及び其の変遷の概要 編成装備、獣医部將校四名准尉水科一名、獣医務一名 本料下士官一名、獣医務下士官一名、兵四名 計五二名にして閣下馬匹衛生校関係〇〇頭の収容診療装備 指揮隷属関係昭和一八年五月より二〇年三月迄ホ一五軍ホ三一師団、昭和二〇年四月より終戦迄ホ三三軍ホ三一師団	

245v

1953

1953

年 月 日		概 要
至昭八 九、二一	一、二六	参加せる主要なる作戦（戦斗）の概要 「ワラワシ」の作戦並に次期態勢移行の爲、作戦参加 無作戦参加
昭八 四、二七	一、二六	「イラワシ」河野並に「メイクテラ」附近会戦参加 克作戦参加
昭八 四、二七	一、二六	「サルウイン」河野防衛作戦参加 終戦より飯還立の行動の概要
昭八 八、二九	一、二六	終戦時は「ビルマ」国「タトン」県、チュエガン村に位置し 「タトン」県パンゴン村へ異動集結 同地に於て、連合国軍へ部隊装備兵器の引渡を完了 タトン県「セマト」へ村へ集結終戦業務に従事し 「ムドン」へ集結 「タニビサヤ」へ異動、同地に於て宿舍建築作業に従事 再度「ムトン」へ集結 乗船の爲「モールメン」へ出発 V〇五一号へ乗船 同港出帆 広島大竹港へ上陸帰還す

~246~

1954

第三一師團歩兵才一二四連隊

年月日	支那事変概要	大東亞戦争行動概要
	昭和九、九、一八師團動員下令 衢州市舞鶴跡歩の二四留、 守隊兵舎に於て編成 一九二九天軍旗揮度 一九二九門司港出発 一九二五中支杭州港金山衛附近上陸 一九二五楓涇鎮山蒸湖進撃作戦 一九二五蕪湖↓杭州進撃作戦 一九二六杭州湖州附近警備 一九二六上海附近警備 一九二六上海出発 一九二六南大印土湾上陸 一九二六廣州附近警備 一九二六掃蕩戦 一九二六翁英作戦 一九二六賓陽作戦	昭和六、一、二四南支虎門出発 一九二六八印カムラン湾集結 一九二八大東亞戦争参加 一九二九カムラン湾出帆 一九二九英領蘭領ボルネオ、略戦 一九二九比島作戦参加 一九二九ガタルカナル島上陸 一九二九ガタルカナル作戦 一九二九ガタルカナル出発 一九二九印西貢上陸 一九二九一師團編入 一九二九大ビルマ、チヤテン集結 一九二九「ウ」号作戦「カ」号作戦並 加に次期作戦移行の急の作戦参

この内

~248~

1956

歩兵第五八連隊略歴

年月日	概	要
明治三十七年五月	歩一五師団	
七、四	東京に於て編成完結	
八、八	軍旗拝受(歩一五師団長 中厚若年連隊長渡辺	
八、二	平岳港出帆	
九、二	大連着	
九、八	鉄嶺西北方にて歩二軍戦斗序列に入り附近の警備	
九、九	歩二軍の戦斗序列を脱し幹国地部守備隊となり平壤	
四〇、三、二	内地帰還の爲平壤出発	
三、一三	習心野着	
一、二五	栃木県特別大演習に参加	
三、一〇、二	萬田入城	
四、一、二	再度栃木県特別大演習に参加	
六、元、一、一五	埼玉県特別大演習に参加	
大正四、一		
四、一	奉天着	

乙外

~250~

1958

年 月 日	概 要
大田 六〇	高田飯還
九 一、九	臨時編成下令
一、四	完結
一、五	高田出発
二、四	「バイカル」州「チタ」附近にて才五師団長
四、八	「チタ」州「バクレミヨウ」附近の戦斗
四、八	「チタ」
七、五	「バクレミヨウ」 「チエルノフスキー」の警備
八、九	「バイカル」撤退
九、九	「ウラジストンク」集結
百、六	尾港に移動守備
四、	尾港出発
五、二	高田飯還
五、天	復員完結
二、六	静岡県神戸川の大演習に参加
大田 五、一	廢止令
五、一五	軍旗奉還
二、九、九	才一三師団動員下令

~251~

1959

1960

年 月 日	概	要
五五 三三	蒙賊警備	
六六 六六	正陽関台領	
六六 六六	渡河攻撃並正陽関警備	
六六 六六	廬州に向ふ取進	
六七 六六	武漢攻撃準備	
六八 六六	渾河河畔の戦斗	
六八 六六	史河河畔戦斗	
六九 六六	富金山・城道撃戦斗	
七〇 六六	新店の戦斗	
七〇 六六	黄破附近の戦斗	
七〇 六六	羅田英山の攻略	
七〇 六六	黄破附近警備	
七〇 六六	江南地区への転移部隊警備	
七〇 六六	表東会戦準備	
七〇 六六	沿江攻略戦作戦	
七〇 六六	晋元岳口附近警備	
七〇 六六	才一次宜昌作戦参加の急岳口出発	
七〇 六六	洋樺鎮北方攻撃に参加	

~253~

1961

年月日		概	要
昭和六、五	六、一五	漢水渡河才二次宜昌作戰参加	
六、一六	六、一六	宜昌突入	
六、一七	六、一七	宜昌掃蕩	
六、一八	六、一八	宜昌北方地区掃蕩戦	
六、一九	六、一九	宜昌整備	
七、一	七、一	宜昌長江渡河作戰完了石榴河に位置宣西整備	
七、二	七、二	宣西突破戦	
七、三	七、三	陶 陶附近の戦斗	
七、四	七、四	宜昌北方作戦	
七、五	七、五	長沙作戦	
七、六	七、六	秋季宜昌周辺の戦斗	
七、七	七、七	宜昌出發、太山嶺着	
七、八	七、八	太山嶺出發	
七、九	七、九	子陵嶺着	
七、一〇	七、一〇	歩一二六連隊と対抗演習	
七、一一	七、一一	編成	
七、一二	七、一二	子陵嶺出發	
七、一三	七、一三	機刀約整備	

~254~

1001

1962

4の外

年 月 日	概	要
昭六・一・八	編成完結	
一・九	撥才名出発	
一・五	揚子着	
一・二	揚子出帆	
一・三	吳淞上陸	
一・五	吳淞出帆	
一・六	昭南上陸	
一・二	「マライ」「クアラカンサル」着、同日より「マライ」半島整備	
一・五	編成地集結のため「クアラカンサル」出発	
一・六	泰マライ国境「バタンベッサ」通過	
一・六	桑緬国境通過	
一・一	臨時編成改正下令	
一・七	ペグー出発	
一・八	イエウ着	
一・九	イエウ出発	
一・一〇	クーサー県、ワヨンゴン着	
一・一一	ワヨンゴン出発	
一・一二	モーライ県ペンパ着	

～255～

1963

年	月	日	概	要
昭	三	四	作戦開始のため「ムンパ」出発	
三	三	モ	印緬国境通過（モニピー）	
三	三	モ	サンジマラク附近の戦い	
三	三	モ	イヒマ附近の戦い	
六	三	モ	転進のため印緬国境フミ木通過	
六	三	モ	「ウ」号作戦「九」号作戦並びに長期態勢移行のための作戦	
九	三	モ	盤作戦	
九	三	モ	シマパニー出発	
一	三	モ	モンドー着	
一	三	モ	テンゴシー着	
一	三	モ	ゴダニー着	
一	三	モ	インレジー着	
一	三	モ	軍令陸甲オ一五一五号により編成改正下令	
一	三	モ	編成完結	
一	三	モ	イラワジ河畔会戦「メーカーテラ」附近会戦	
一	三	モ	免作戦	
一	三	モ	「ターン」県ニードダ着	
一	三	モ	大命により停戦下令	

~256~

1964

年月日	概	要
昭和五	サルウイニ河孟防衛作戦	
八二	軍糧奉焼	
八二	タトン県パニア集結	
八六	ユウゲ―着	
九一	ユウゲ―発	
九六	ゼマト工着	
二二	ゼマト工発	
二四	アムファスト県ムドン着	
六五	ムドン発	
六六	ビルマ国モールメン出帆	
七三	昭南寄港	
七四	昭南発	
七五	大竹港上陸	
七五	復員完結	
八五	戦病死 約三千四百名	
八五	約七百八十名	
三八	捕虜一〇二名、下士官八二五名、兵二二一六名	

257~

1965

年月日	概	要
至 五 六 九	歴代部隊長名 大佐 渡辺 模十郎 大佐 平野 舍六 大佐 宮 津 幾太郎 大佐 羽 八 介三郎 大佐 倉 林 公 佐 大佐 永 松 義 大佐 大 佐 大 佐 大 佐 大 佐 大佐 堀 内 文次郎 大佐 和 田 以 時 大佐 竹 内 栄 喜 大佐 小 川 恒三郎 大佐 小 村 勝三 大佐 緒 毛 謙	
至 二 三 九	部隊事情精通者 (チー三師団動員下令直西長江渡河作戦) 新潟県刈羽郡中通村大字曾地新田陸軍 南魚沼郡大巻村大字大杉新田二九陸軍准尉 小 倉 清 作	
至 三 六 三	(折店の戦斗アムフアスト県ムドン) 栃木県芳賀郡山前村大字島八六七 陸軍大尉 大 賀 寿一郎 道 家 和 雄 竹 田 正 信 亀 山 庄	
至 六 三 五	新潟県柏崎市木町二丁目八一 中頸城郡直江津町大字直江津 ウチ作戦チンドンワーミ渡河アウアスト県ムドン 佐賀県秋田郡武雄町大字富岡八三六七 陸軍少佐 原	
至 六 三 五	(以下不明)	

~258~

1966

)

第三師步兵第一三八連隊

~257~

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
<http://www.jacar.go.jp>

5の内

年 月 日	要	概
至昭 四、三 五、三		「イ」河畔会戦並「メ」クテラ」附近の会戦 克修戦
至昭 八、五 五、三		「サルウイン」河孟防衛作戦 終戦
至昭 八、三 五、三		配備を徹回「タトン」県「インニン」附近に集結を完了、同地にて兵器の引渡 準備並実施
至昭 九、三 五、三		近に「タトン」県「ゼマトエ」に移駐を完了す 泰蘭方面へ前進の命に依り、「ゼマトエ」発
至昭 一、三 五、三		「タトン」県ムドン着、引續き前進を準備するも状況変化に依り前進中止、同 地に駐留す
至昭 二、四 五、三		「ムドニ」発、同月五日「バマジー」(ランガン北方六〇里)着 同地に駐留
至昭 三、七 五、三		日「バマジー」発「ペグー」に移駐、現在に至る 部隊長 陸軍大佐 鳥飼恒男

~260~

1968

南方軍復員本部復員課

中將 田 中 信 男

年 月 日	概 要
昭和四三、 四、三	仙台市に於てオ三エ兵師団司令部編成完結 編成地、仙台市
四、三	新潟港出帆
四、三	中支湖北省武昌上陸以後武漢地区警備
一、九	武昌附近より江西省義泉安義に移駐す
四、五	中旬中支江西省安義附近より松進北支山西省に移駐す
五、五	北支山西省より松進し北支銅山県徐州に移駐す
五、五	より昭一七六、五、五、南部ビルマ作戦、北部ビルマ作戦参加
五、一	泰緬国境通過緬甸に移駐す
一、三	より昭一七、六、五、立南部ビルマ作戦、北部ビルマ作戦参加
一、一	より昭一九三、二、五、南部ビルマ作戦、北部ビルマ作戦参加
五、三	より昭二〇、八、五、ウ号作戦並に次期態勢移行の爲作戦 (インパール周回作戦)盤作戦免作戦、堅作戦に参加
五、八	終戦 泰緬ナゴンバトン集結、終戦業務に従事

~261~

1969

年月日	概	要
昭二 四 三	ナコンパトン出発	
五 四	盤谷出発	
六 三	浦賀上陸 復員完結	
天 三 二	指揮隷属関係及び其の変遷の概要	
五 七 五	カ一五隷下	
八 四	緬甸方面軍隷下	
九 三 三	参加せる主要なる作戦（戦斗）の概要 ウ号作戦並びに次期態勢移行の急作戦 印度アッサム州インパール周辺の作戦中	
五 二	戦死将校以下 五二、 戦病死四七、 戦傷死九、 生死不明二、 入院後消息不明二三	
五 三	盤作戦 トンガン附近よりチンドウイン河畔に向ひ移動中	
五 四	戦死、将校以下一九、戦病死、戦病死四一、入院後消息不明兵一四	
五 五	イラワジ河畔並メークテラー附近の合戦	
五 六	戦死 将校以下二二 戦病死下士官以下八 戦傷死生死不明 将校以下三	
入院後消息不明、下士官以下一一		

262~

1970

年月日	概	要
昭和四、三	免作戦ビルマ国ラインデイン附近よりモールメン	
	戦死、将校以下一五	戦病死、下士以下二、入院後消息不明、下士以下六、生死不明 将校以下三
昭和五、三	堅作戦	ビルマ国モールメン附近にナセリウム地区
至八、一〇	警備中	
	戦病死 将校以下八	入院後消息不明 下士官以下二五
	終戦より帰還迄の行動の概要	
八、八	緬甸国タンビサヤ出発	
八、五	シマム国ナゴンパトン集結す、	
	再後、終線業務に従事す	
二、四、三〇	終戦より帰還迄の行動の概要	
五、一	復員帰還のため「ナゴンパトン」出発	
五、四	盤谷到着	
五、五	浦賀港入港	
六、三	浦賀上陸	
六、五	復員完結	

~263~

1971

年月日	概要
昭和 一 三 三	其の部隊の経歴中特異と認めらるる事項等 軍令陸甲才一四〇号編成改正により才三三師団兵器勤務隊へ兵器部は才三三師団防疫給水部は軍医部に編成、又新に才三三師団管理部の編成完結す

264~

1972

第33師団司令部

第33師団長

田中 信男

年月日	概	要
昭和三年四月三	仙台に於て第33師団司令部編成完結	
四月三	新海出帆	
四月九	支那湖北省武昌上陸、以後武漢地区の警備	
四月九	武昌附近より江西省安義縣安義に移駐す	
四月九	中支那江西省安義縣附近より転進 北支那山西省に移駐す	
四月九	北支那山西省より転進し北支那銅山県徐州に移駐す	
四月九	中支那南口港出発し	
四月九	「シヤム」国「盤谷」に上陸す	
四月九	「シヤム」及「ビルマ」国境を通過「ビルマ」に移駐す	
四月九	南部「ビルマ」作戦参加	
四月九	北部「ビルマ」作戦参加	
四月九	「ビルマ」防衛	
四月九	春季反撃作戦参加	
四月九	「ウ」号作戦並次期態勢移行のため作戦（印度「アッサム」州「インパール」	
四月九	周辺の作戦中 戦死持校四、下士官二五 兵二二、軍属一 計五二名	

1973

1974

年月日	概	要
昭和 三 八	兵 六名あり 生死不明者 将校一、兵二 計三名 經理部、主計中尉 沖 広二郎 「ビルマ」国「シンヤマン」県「ミンタ」附近に於て軍需品輸送に従事中其の中継所たる「テンパン」より単身「ミンタ」集積所に連絡の爲、出発せる儘、生死不明となる 軍医部上等兵 安田敏夫 上等兵 菊地兵治 上記二名は部隊を離れ（自動車修理のため）輜重兵オミミ連隊、中隊隊長、杉山大尉（当時中尉）の区延下に入り行動中 「ビルマ」国「メイク、テイラー」県「ピンダレー」西北 約一五軒附近に於ける包圍圈突破の際生死不明となる 「克」作戦、「ビルマ」国「ティンディン」附近より「モールメン」に向い、転進中 戦死将校一 下士官一 兵三 計一五名 戦病死、下士官一、軍属一 計二名 戦傷並に疾病のため入院せる下士官二、兵四 計六名は入院後師団司令部の前進路と別路前進せしめられ、爾後、消息不明 生死不明者将校一、軍属一、兵一、計三名 参謀部、少尉、藤木康夫 「ビルマ」国「タダ」県「アレカン」（「タダ」北方三五哩）附近に於て敵中突破の爲、夜間機動中集中破砲撃を受け	
昭和 三 八		
四、二		

267~

1975

年月日	概	要
昭三、四、五	たる際、生死不明となる当時本人は下痢の爲身体衰弱しありたり 参謀部 通訳、村田元三郎 「ビルマ」国「シマン」州「カロー」より「ロイ カウ」方面に後方機動中「ロイカウ」道「三埋」ダインガンゴン」附近に 於て生死不明となる	
四、五	経理部、兵長、今野年雄、兵団後方機動中「ビルマ」国「シマン」州 「カロー」到着、指揮官 伊藤主計大尉以下砲撃退避所に退避せり、今野兵長 是到着地点に於て二三日一時頃、洗濯を爲しありて終り次々退避所に至るべ き旨、申し居たり、然るに、午後七時出発時間となるも来らざる為、約三時間 に亘り八方搜索せるも発見し得ず、遂に行方不明となる	
昭三、八、五、三〇	「堅」作戦 「ビルマ」国「モールメン」附近「テナセリウム」地区の整備中 戦病死、持校一、下士官三、兵三 軍属一 計八名	
八、六、八、五	入院後連絡絶し消息不明なるもの下士官四、兵二〇 軍属一 計二五名 「ビルマ」国「タンビサヤ」出発 「シナム」国「ナゴンパトム」に集結す、爾後、終戦業務に従事 終戦以後に於ける損耗	
昭三、四、五	戦病死、下士官三、兵四、軍属一、計八名 入院後消息不明となるもの兵一名あり 復員帰還のため「シナム」国「ナゴンパトム」出発（但し、経理部軍医部、歎	

~268~

1976

年月日	概	要
昭二 五、一	区部は乗船の際別行動となる）	「盤谷」到着
五、四		
五、五		
六、三		
六、五		
	「盤谷」港出帆	浦賀港入港
	「浦賀」上陸	復員完結

~267~

1977

歩兵才ニ一三連隊

年 月 日	概	要
昭和 二 六 四 三 三	中支那より泰國に転進、爾後「ビルマ」に転進 「ビルマ」作戦中「ミヤマンダー」「マグウェ」「イエナンギヤン」「モニワ」 「シェン」「オークタン」「パウングビン」「ホマリ」附近の戦闘に於 て	
六 六 六 六	戦死、将校と下士官兵一五 「ビルマ」作戦終了「プローム」附近集結 「アキマダ」に転進	
一 六 五 五	「アキマダ」附近の警備中「ブチドン」「ラチドン」「ゴンダン」附近の戦闘 に於ての戦死、将校と下士官兵一六、生死不明、将校一（別紙）	
一 五 五 五	「アキマダ」方面より三三号作戦中「キョクドク」「マラタン」「アポークワ」 「カンゾク」「タンタモ」「キンタン」「ガウンタラ」「トチドン」「ラチドン」生死 不明、将校一（別紙）	
九 七 三 七	「シマン」州「タウンジ」附近に転進、同地附近の警備 「チンドウイン」県「マザギヨウ」附近に転進 「マザギヨウ」及び「モライク」地区の警備中「キョウクチヨウ」道々標ニ 戦死、将校一、下士官兵二四	

270

1978

年 月 日	概	要
至 元 七 五	「ウ」号作戦（「インパール」作戦）参加中「モウ」「ウイトック」「モーレ」 「マモール」「四五六二」高地「クデク」「クンビー」「パレル」東北方「カ イモール」「テグソパール」「ボッシュンバム」「ビシェンプール」附近の戦 闘及び転進に於て、戦死将校五ニ、下士官一ニ、生死不明将校一、下士官 一〇六、負傷入院せるも其の後方不明なるもの	
三 九 八	「モ」ライク」地区に転進、同地附近の整備、生死不明兵一（別紙） 「盤」作戦中「ケンマンガレー」「モーク」「トンビン」「レセガン」「モ ライク」「パルサワ」「ゴンガ」附近の戦闘に於て	
五 二 三	戦死将校九、下士官兵八四 生死不明 下士官兵二ニ 負傷入院せるも其の後不明なるもの将校一、下士官兵九 「モニワ」附近に転進 「イラワナ」河畔会戦中「モニワ」附近及び「イラワシ」「チンドウイン」 両河中州附近「ミンダヤン」「キマウセ」「ヤカンジー」「テンガンジー」附 近の戦闘に於て	
戦死 将校二一、下士官兵一八四 生死不明 将校三、下士官兵三四（別紙）		

1979

年月日	概	要
三 四 五 三	負傷入院せるも其の後不明なるもの將校一、下士官兵一九 「パマンガス」附近に転進 「克作戦中」「パマンガス」附近の戦闘及び「ハフン」方面への転進に於て、 戦死、將校一、下士官兵一九 生死不明、兵四（別紙） 負傷入院せるも、其の後不明なるもの、下士官兵三 「テナセリウム」地区へ転進、同地附近の警備 泰国へ転進	附記 「オ一大隊」「アキヤア」方面「ハ」号作戦参加中「トントクバザ」 「キヨウキツト」「シンゼイワ」「ムナドン」西方四料附近の戦闘に於て、 戦死、將校九、下士官兵一五二 生死不明、下士官兵一三（別紙） 負傷入院せるも、其の後不明なるもの、將校一、下士官兵一三 「オ一中隊（オ一隊肉銃中隊の一小隊属）」「カ」号作戦参加中「インドウ」北 方「モール」附近の戦闘に於て 戦死、將校二、下士官兵二一

1980

~2.2~

年月日	概	要
歴代部隊長名 大佐 飯田雅雄 大佐 河村秀郎 大佐 宮脇幸助 大佐 温井親光 大佐 河原右内 部隊事情精通者 茨城県結城郡西豊田村大字仁江戸一三六二 陸軍曹長 高野宏 茨城県桃生郡楯浦村字女川要害三〇ノ一 陸軍准尉 佐々木正一 茨城県仙台市所小泉字屋敷四二 陸軍大尉 宮崎道隆 順序は精通せるものの順序とす		

1981